



2024年度 環境諸問題研究・活動報告書

公益財団法人 緑の地球防衛基金

2025年6月1日発行

本報告書は、公益財団法人「緑の地球防衛基金」が、

① 自ら実施した植林事業

② 「地球にやさしいカード」からの寄付金を財源

として各種環境団体に実施した助成事業

合計14事業についての2024年度中の活動報告です。

ごあいさつ

公益財団法人 緑の地球防衛基金
理事長 大石 正 光



二酸化炭素の排出量の急激な増加は、地球の自然吸収力を超えて地球温暖化を引き起こしました。陸地の森林の吸収は限界を超え、海水はすでに酸性化が進んでいますので、海洋生物にも多大な悪影響が発生しています。さらに、南極の氷河棚の崩壊や、北極海の凍結温度の上昇による氷の減少で、海水面が上昇し世界中の陸地が減少するなど、目に見える災害が世界中に広がってきました。地上では、ハワイ・マウイ島やロサンゼルス山火事、オーストラリアの広大なユーカリ森林火災によるコアラの被害など、ヨーロッパでは豪雨による洪水被害など、世界中で異常気象による災害だらけなのです。日本でも、岩手・大船渡市をはじめ岡山・今治での山林火災などが起きており、世界中で自然災害が多発しています。

アメリカをはじめ多くの国では、このような危機的な地球の現実を認めようとしません。いまだに経済発展ばかり主張している「人間の愚かさ」で「地球の破滅」だけはしてはならないと訴え続けなければなりません!!

私どもは、40年前からアフリカ・キリマンジャロ山中腹の植林と国連による植林事業への参画、中国・陝西省、ベトナム・ラオカイなど各国政府機関との合同植林事業を進めてきました。それぞれの事業は、広域にわたっておりますが、地域住民に喜ばれる都市公園の緑化事業など、多目的に対応する事業を進めてきました。本年からは、日本政府の協力を頂いて、ラオス国立大学との共同植林事業に取り組む予定です。小さな活動ではありますが、地球環境の保全に役立っていると確信して、これからも活動を続けてまいります。

緑の地球防衛基金は、多くの皆様に支えられて地球の植林活動と環境保護団体の支援を続けてまいりました。今年は43年目になりますが、これからも皆様にご理解いただいて活動してまいります。

多くの皆様に支えられております「環境諸問題研究・活動報告書」を本年も発行いたしますので、ご一読賜りますようお願い申し上げます。

2024年度環境諸問題研究・活動報告書

目次	ページ
◆ 着実に進捗してきたベトナム・ラオカイ省植林事業 公益財団法人 緑の地球防衛基金	2
◆ ラオスにおける新たな植林事業の検討 公益財団法人 緑の地球防衛基金	4
◆ カポトジャリーナ先住民保護区の消火・防火を目的とする「消防団」事業 特定非営利活動法人 熱帯森林保護団体	6
◆ 尾瀬の豊かな自然を後世に伝えるために－尾瀬沼環境DNA調査の事始め－ 特定非営利活動法人 尾瀬自然保護ネットワーク	8
◆ 立山の自然を守る－ひとりより、みんなで－ 特定非営利活動法人 立山自然保護ネットワーク	10
◆ 白保のサンゴを守る 特定非営利活動法人 夏花	12
◆ ヒマラヤ保全協会 2024 年度活動報告 認定特定非営利活動法人 ヒマラヤ保全協会	14
◆ ウミガメとその産卵地を守る 特定非営利活動法人 サンクチュアリエヌピーオー	16
◆ 2024 年度「トンボの保護区を守る」活動報告 特定非営利活動法人 桶ヶ谷沼を考える会	18
◆ 上総自然学校活動報告 2024 上総自然学校（現 川原井自然学校）	20
◆ ゾウを守るための活動報告 2024 認定特定非営利活動法人 トラ・ゾウ保護基金	22
◆ 日本最大級のオオサンショウウオの生息地での環境保全活動 真庭遺産研究会	24
◆ インドネシアにおけるオランウータン保護活動の基盤強化に向けた植林活動 一般社団法人 熱帯林行動ネットワーク	26
◆ NPO クワガタ探検隊 2024 年度活動報告 特定非営利活動法人 NPO クワガタ探検隊	28
掲載団体の URL	30

着実に進捗してきたベトナム・ラオカイ省植林事業

公益財団法人 緑の地球防衛基金

緑の地球防衛基金が、2020年4月にベトナム政府との間で覚書を締結した「ベトナム・ラオカイ省環境保護植林事業」は、3万本の植林と、補植や除草など森林の育成管理が進められ、2025年3月に、事業期間を終了しました。

■ 1. 植林事業地の概況

植林場所は、中国との国境に近いベトナム最北部の山間地帯に位置しており、2023年の平均気温は、例年とほぼ同じ約20℃でした。

最も暑い6月の平均気温は32℃に達する一方で、最も寒い1～3月の平均気温は12℃に止まりました。0℃まで下がる日もあり、低温の時は有害な塩霧が発生することが多く、人と家畜の健康や、作物の生育に大きな影響を与えたとのことでした。



ベトナムの地図。ラオカイ省は、中国との国境に接するベトナム最北部の省です

■ 2. 苗木の生育状況

①馬尾松（タイワンアカマツ）の苗木

2020年8～9月に2万7,000本植栽された馬尾松の苗木は順調に成長しています。

2025年2月現在、若木の平均樹高は約3mで、5mに達している木もあるとのことでした。成長は比較的均一です。2023年には、枯れた若木等に対応して1,000本の苗木が補植されました。しかし、2024年には樹木が一定の高さに達し、すでに森林になってきていることから、森林整備のみを行い、追加の補植は行われませんでした。



2020年に2万7,000本植林した馬尾松。生育は良好で、ベトナム政府の担当者と比較して、大きく成長している様子が分かります

②カントンアブラギリの種子

カントンアブラギリは、2020年10～11月、森林区画の境界線沿いに3,000本分が直播されました。カントンアブラギリは、種子から育てていることに加えて、植林場所は、密度が高く岩石の割合が高いという土壌特性を有するため、成長が遅れています。カントンアブラギリの平均樹高は、2025年2月現在、2～4m、幹の直径は2～20cmとなっています。

ベトナム側は、2023年にカントンアブラギリの補植を継続しましたが、植林地域の土壌は緻密で、石の割合が高いなどの悪条件もあり、成長は緩やかに止まっています。



2020年に3,000本直播したカントンアブラギリ。植林場所は石の割合が高いなどの悪条件から、成長は緩やかになっています

■ 3. 除草など森林整備状況

2024年は、2回の森林整備作業が行われました。

3月の最初の作業期間には、木の根元の除草と鋤入れ、及び補植が行われました。9月の2回目の作業期間には、植栽した低木に絡む雑草や蔓の除去が行われました。植林地は急峻な地形であり、苗木の樹冠を保護して成長を促進していたため、枝の剪定はまだ行われておりません。

各作業期間には30～40人が参加し、ナイフや鋤を使って手作業により雑草や蔓を刈り取りながら、同時に苗木の根元に鋤入れを行い、若い木が光合成と成長に最適な条件を満たせるようにしました。さらに、森林警備員や地元住民が時々森を訪れ、森林の木々が家畜や野生動物の被害を受けていないか確認しました。

■ 4. 植樹と手入れにあたって困難だったこと

植林地が住宅地から離れているため、資材や苗木の運搬、植林の実施、その後の植林地の手入れのための移動が非常に困難だったとベトナム側から報告がありました。

また、植林地が急峻な地形で、多くの蔓や低木の成長が非常に早かったことも、植林の世話をする地元の人々に多くの困難をもたらしたと報告されました。

加えて、2022年から引き続く円相場的大幅下落（円安）のため、当基金からの助成金が大きく目減りし、その結果、2023年夏には、ベトナム側から当基金に、事業資金が不足して困っている旨の連絡が入る事態になりました。

本件に関しては、最終的に不足額を追加で助成することとしました。ベトナム側から、当基金の対応に深く感謝する旨の連絡を受けるなど一件落着きましたが、為替レートに関係した問題の発生は、初めての経験でした。

こうした様々な困難はありましたが、これまでの5年間、植林事業は概ね順調に推移してきました。これは、ベトナム側の官民挙げての真摯な協力と、当基金の会員の皆様、及び貴重なご寄付をお寄せくださった多くの皆様のご協力の賜物であります。

本稿をお借りして、皆様に厚く御礼申し上げます。

ラオスにおける新たな植林事業の検討

公益財団法人 緑の地球防衛基金

■ ラオスの地理的特性及び森林の状況

ラオス人民民主共和国（以下「ラオス」という。）は、インドシナ半島の内陸部に所在し、国土面積23万6,800km²（日本の本州の面積とほぼ同じ）、人口約733万人（2021年現在）、首都はビエンチャンです。国土の70%は、高原や山岳地帯です。

ラオスは、熱帯地域に所在し、モンスーン（季節風）の影響により、明瞭に雨季と乾季があります。雨季は6月から10月で、年間総雨量のほとんどは雨季に集中します。乾季は11月から2月下旬です。気候はサバンナ気候です。

ラオスでは、1940年代に70%だった森林率が2002年には41.5%まで低下しました。ラオス政府は、森林率を70%まで回復させる計画を立てていますが、2010年現在58%に止まっており、このような状況下、森林の復興等に力を入れています。



ラオスの地図。
東南アジアで唯一海に面していない内陸国です。

■ ラオスでの新たな植林事業の検討経緯

2024年度まで当基金が支援してきたベトナム政府の外資導入政策が変更され、今後ベトナムで新たな植林事業を実施することが、事実上困難な状況になりました。

このような状況下において、JICAから、他の民間団体と共同で、ラオスにおける植林事業に参加しないかとの話がありました。当基金からJICAに対して、当該民間団体との共同事業ではなく、ラオス政府から新たな植林事業を提案するよう働きかけて欲しい旨依頼し、これを機にラオスでの新たな植林事業の検討が始まりました。

2024年3月には、ラオス農林省林業局からの依頼を受け、大石理事長名で、当基金が考えている助成規模を伝えていたところ、2024年10月にラオス農林省林業局から、ラオス国立大学が当基金との植林事業に協力するとの連絡があり、12月には、ラオス側から当該事業の詳細が送られてきました。

さらに、2025年1月に、上記を内容とする合意書案が送付されてきました。

2025年3月末現在、JICAの協力も得つつ、当基金とラオス側とで合意書案締結に向けて協議を続けています。また、日本政府の協力を得るため、2025年1月には、石破茂内閣総理大臣及び岩屋剛外務大臣に働きかけ、本件事業の実施に際して日本政府の協力を取り付けています。さらに、2025年5月に大石理事長がラオスを訪問し、ラオス側との協議、植林現場の視察を行い、可能ならば本件事業の合意書に正式署名し、新たな植林事業を開始する予定です。

■ ラオスにおける新たな植林事業の概要

1. 事業名：環境保護のための植林によるラオスの緑化
2. 事業実施者：ラオス国立大学
3. 事業実施期間：2025 年度～ 2029 年度の 5 年間
4. 年間予算額：年 1 万米ドル（約 150 万円）、総額 5 万米ドル
5. 事業概要

(1) 目的：

- ①ラオス国立大学の実験林は総面積 1,303 ヘクタールに及ぶが、森林火災が繰り返されている。5 年間で 25 ヘクタールの荒廃した森林地帯を正常に復元する。
- ②その際、ラオス国立大学及び林業省の教授と学生のための研究及び学習の場を設けて得たデータは、今後のラオス国内の緑化に活用する。

(2) 植林面積：毎年 5 ヘクタール。5 年間で 25 ヘクタール

(3) 植林本数：1 ヘクタール当たり 625 本。（持続可能な森林を確立するために、4 m × 4 m の間隔で植樹し、各樹木が 16㎡ のスペースを占めるようにする。）年間 3,125 本（625 本 × 5）5 年間 15,625 本（3,125 本 × 5）。

(4) 樹種：森林の修復、再生、環境保全に最適な 4 種類の在来木材種。（マイヤン、マイカーン、マイドゥ、マイテカの 4 種類。苗木数は各 4,000 本）



マイヤン



マイカーン

(参考 樹種について)

（*マイヤン：フタバガキ アラトゥス）フタバガキ科の常緑樹。樹高 45 m 以上、幹直径 2.5 m 程度に達するチーク材と並ぶ重要な木材種です。

（*マイカーン：パラショレア）フタバガキ科の常緑樹。樹高 40 ～ 60 m 程度。フタバガキ科パラショレア属の木材は、総称でラワン材や南洋材等とよばれ利用されています。

（*マイドゥ：ビルマカリン）樹高 10 ～ 30 m、幹直径 1.7 m。乾季は落葉する。木材として耐久性があり、家具、建築用木材などに重用されています。

（*マイテカ：アフゼリア・キシロカルパ）樹高 30 m、幹の直径は最大で 2 m に達する落葉高木。耐久性と美しい木目が評価され、装飾品、高級家具の材料として重宝されています。



マイドゥ



マイテカ

カポトジャリーナ先住民保護区の消火・ 防火を目的とする「消防団」事業

特定非営利活動法人 熱帯森林保護団体

■ 事業の背景

支援対象地域は、日本から一番遠い2万 km 離れたアマゾンの熱帯林で、ブラジル政府が正式に先住民保護区と承認した総面積が約18万平方 km と広大な面積を有します。その地域にインディオと呼ばれる先住民族18部族、約2万人が独自の文化を継承し存続しています。

この地域は氷河期にも緑が残ったので、種の避難場所となり地球上の生物遺伝子資源の宝庫とも言われています。しかし、近年この地域は世界的な異常気象と急速な開発の影響で、雨季に従来の雨量が望めず、年間を通じて日中の気温は50℃にも達する一方、夜は10℃近くまで下がり、寒暖差が40℃、湿度が10%にも満たない状態が続いています。このような状態はここ10年くらい前から起こり、熱帯林は高温と乾燥化に歯止めが効かず、川は干上がり、森を住处とする野生生物の絶滅も危惧されています。

先住民居住地へ入る時は、政府からの正式な滞在許可証を申請する必要があります。しかし、この地に生息する珍しい動植物が高価な値がつくために、不法侵入者による密猟が後を絶ちません。その密猟者たちが野営し、火の不始末から森の火災が発生するケースが深刻な問題となっています。一度火災が発生すると火は瞬く間に広がり、森が火の海と化します。

こうした状況を回避する対策として、カヤポ族の長老ラオーニやリーダーのメガロンからカヤポ族とジュルーナ族の若者で組織する「消防団事業」の支援要請があり、2016年から、この事業を開始しました。

■ 事業の内容・目的

当事業は森を火から守る目的で消火、防火活動を実施します。2部族（カヤポ族&ジュルーナ族）14か所から招聘された若者約40名が拠点となるピアラスに集合し、マトグロッソ州の軍消防署から派遣専門家の指導の下、1か月防火・消火の講習会を催し終了後に居住地に戻り、消火活動の実施にあたりました。他部族でも「消防団」事業は行われていましたが、他者との大きな違いは現地住民のインディオ若者が主体性を持ち「我々が地球上の酸素供給源であるアマゾンの森を守るんだ！」という強い意



女性消防士が新たに加わった消防団



インディオ消防士による消火活動

志とプライドを根底に臨んでいるところでした。年間を通して雨季でも森をパトロールし、密猟者の摘発等も積極的に実施していました。その結果、この地域は数年間、火災発生時も迅速に現場に直行し消火活動を行っていたので、大火にならず鎮火していました。この業績を政府も高く評価し、インディオ消防士に正式な消防士として資格を与えるまでに至ったことは喜ばしいことでした。

10年近く支援してきた当事業も、現地インディオと IBAMA（ブラジル環境・再生可能天然資源院）に委ね、ここ数年で終了と考えていた矢先のことでした。2024年8月22日

に、密猟者の火の不始末から火災が発生し、瞬く間に火が広がり、運悪く乾季だったことと強風で、通常ならば川まで火が来て鎮火するはずが、川の水量が低いため対岸にまで火が届き、甚大なる被害を及ぼしました。アメリカのロスアンジェルス以上に延焼し、10月の雨季が来るまで燃え続けました。消防団員も100名に増やし、必死の消火活動が続けましたが、怪我人が続出し1名が犠牲になりました。大火災を前になすすべがないことを痛感しました。

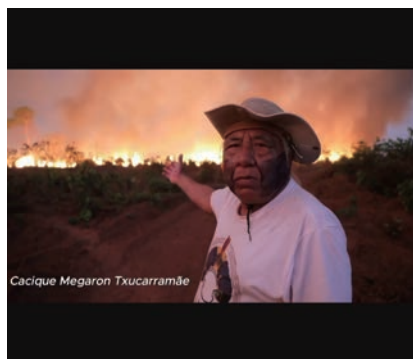
当事業の支援対象地域は63万5,000ha（東京都の約3倍）です。今回の火災で対象地域の約27%の16万8,579haが焼失。カヤポ族ノメベンコクレ村は20軒の家が全焼。拠点であるピアラスで、リーダーのベジャイが雨季のために50年間蓄えておいた栄養素の高いピキの木4,000本も犠牲になりました。薬草にもなるクマルの木も全滅。生きていくための全てを森の恩恵で営んできたインディオの生活が根底から崩されました。同時に野生動物も甚大な被害に遭い、今後どのような暮らしをしていかなければならないか、大きな課題が残されました。

現地との情報交換は通常でもなかなか難しいですが、このような緊急事態では現状がどうなっているのか、なかなか知ることのできない困難さを経験しました。現地からさまざまな支援要請が届いていますが、一番に行動しなければならないことは、現地住民の生活基盤の確立です。現在、ブラジルスタッフと密に連絡をし、7月に当団体スタッフが現地入りし、今後の対策を検討することになっています。

■ 事業の成果・反省

想像以上の状況に翻弄された大火災！アマゾンに留まらず、世界中で大火災が発生しています。これは世界的な異常気象の影響でもありますが、人類の発展を優先し自然を壊し開発したことも一つの要因ではないかと考えます。有限なこの地球の資源を便利さだけを追求した結果、現在人類は大きなツケを払わなければならなくなりました。次世代の存続を望むのならば、私たちは今こそ真剣にこの星の未来を考えるべきでしょう。

アマゾンの火災と先進国との関係は無縁ではありません。アマゾンの森が大豆畑に様変わりし、その大豆を日本人が食している図式が見えてきます。当団体は「消防団事業」を通し、アマゾンの自然とその地域を守っているインディオの存続を目的とした支援事業を遂行していきます。



火災現場で陣頭指揮をとる
カヤポ族リーダー



空からの消火活動

尾瀬の豊かな自然を後世に伝えるために —尾瀬沼 環境 DNA 調査の事始め—

特定非営利活動法人 尾瀬自然保護ネットワーク

■ はじめに

環境 DNA 調査とは、個々の生物個体を直接捕獲せず、土壌や淡水海水、あるいは大気といった環境中に含まれる遺伝子情報（環境 DNA）を用いて、生物の生息情報を取得する調査方法です。環境中には様々な生物が存在しますが、常に DNA を周囲に放出しており、環境中にはそれが蓄積されます。生息する生物由来の DNA を解析することで、その環境に生息する生物を網羅的に特定化され、生物相の現状把握が可能となり、特に希少種保全対策や外来種対策にも有効な調査方法です。また 2024 年 6 月には環境省が『環境 DNA 分析技術を用いた調査手法の手引き（淡水魚類・両生類）』を公表しました。

■ 環境 DNA の特徴

湖沼や河川で行われる生物相調査は、基本的には道具（漁具や網など）を使い捕獲や目視確認で行います。しかし複雑な地形や植生により投網が困難、濁りや水流によっては目視では確認できない、また生物が隠れてしまい捕獲ができないなど困難と時間や多大な調査労力が伴います。一方、環境 DNA 調査は動植物の排泄物、組織片などに由来する水中に存在する DNA 断片を、水中より抽出し DNA の有無から生物の存在を推定するという新しい調査手法です。



採水という比較的簡易な調査作業



採水して注射筒に吸い込む作業

■ 調査は「採水」という比較的簡易な方法

湖沼や河川より最大 1 リットルほどの水を汲み上げ、注射筒（針のない太めの注射器のようなもの）を使い、その水を筒に吸い取ります。注射筒に入れた水を、フィルターを付けた特殊なカートリッジに通過させることで、水中に漂う生物相の DNA の検体を取り出せます。あとはこの検体を解析できる機関や専門家に分析依頼するという手順です。現地での作業は、一か所約 20 分程度で検体として DNA の取得ができます。また使用する器具はキットで用意され

難なく調査できます。

■ 確認できた尾瀬沼の生物相

尾瀬沼は周辺の小さな河川より水が流れ込む集水域であるため、魚類のみならず多くの昆虫の遺伝子も流れ集まるところです。私たちは長蔵小屋周辺など尾瀬沼の3か所において注意深く採水を実施しました。約1か月後に、検体を提出した研究機関より受けた解析データには、科学的なDNA調査による種の同定ができた昆虫、魚類、鳥類、哺乳類など74科150種が列記されていました。最も多かった種はユスリカ科などハエ目12科30種、カワゲラ目23種、また哺乳類イタチ科1種や両生類サンショウウオ科2種もありました。

■ 希少種と外来種

科	種名	コメント
エゾトンボ科	オオトラフトンボ	群馬 / 絶滅危惧Ⅱ類
エゾトンボ科	コヤマトンボ	尾瀬で初の確認？（未記載種？）
アミメカワゲラ科	ヒロバネアミメカワゲラ	群馬 / 準絶滅危惧
ドジョウ科	キタドジョウ	福島 / 準絶滅危惧
サケ科	ニジマス	生態系被害防止外来種
ヒキガエル科	アズマヒキガエル	福島 / 準絶滅危惧
アカガエル科	ツチガエル	群馬 / 絶滅危惧Ⅱ類
サンショウウオ科	クロサンショウウオ	国 / 準絶滅危惧(NT) 福島 / 準絶滅危惧
カモ科	オシドリ	福島 / 準絶滅危惧、群馬 / 準絶滅危惧

両生類のクロサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、アズマヒキガエル、ツチガエル、ヤマアカガエルや、魚類ではキタドジョウ、フナ、アブラハヤ、ワカサギ、アメマスの他に生態系被害防止外来種であるニジマスの遺伝子も確認されました。

ニジマスは、「生態系被害防止外来種」や「侵略的外来生物」の指定種です。

この指定はニジマスが産卵床を形成する際に、イワナやヤマメ類という在来種を駆逐するためです。尾瀬では平野長蔵氏が、1909（明治42）年ごろに、十和田湖でニジマスやヒメマス養魚場を営む和井内養魚場より淡水魚の卵を100万粒買付けたそうで、今回確認されたDNAは、その子孫と思われます。



山紫水明の尾瀬沼

立山の自然を守る —ひとりより、みんなで—

特定非営利活動法人 立山自然保護ネットワーク

■ 立山黒部アルペンルート沿線などで 20 年目となる外来植物除去活動を実施

2005 年に立山有料道路沿線の 6 地点で外来植物除去活動を始め、2024 年には 20 年目となる活動を低山帯～高山帯の 15 地点で展開し、オオバコ、シロツメクサ、ヨモギ、イタドリなど約 4.9 万本を除去しました。同年には富山県内の 15 の組織や団体が中部山岳国立公園立山地区のうち富山県側で約 14.5 万本の外来植物を除去しているので、当法人は全体の約 3 分の 1 の貢献をしたことになります。中でもスズメノカタビラ、オオバコ、ススキについては当法人の寄与は 70%を超えています。

除去活動を始めて 4 年目には多くの地点でオオバコなどの個体数が激減し、年間 1～2 回の作業で著しい繁茂を防ぐことができるようになりました。その一方で中部山岳国立公園の富山側の入口となる美女平（標高 980 m）は最も早くから開発された場所なのでオオバコが一面に広がっており、埋土種子なども多く根絶は極めて困難です。また、近年ではシロツメクサやホオズキなどが増加傾向にあることが危惧されます。



称名滝展望台での外来植物除去作業

以前から標高 1,600 m の弘法付近にススキが集中していることに疑問を感じていましたが、1950 年代の後半～1960 年頃に開催された「弘法観月会」や「弥陀ヶ原高原 観月の会」に際して下界から持ち込まれたススキの穂から弘法付近にススキが定着したという可能性が高くなってきました。そこで、2024 年には弘法～七曲り間でススキの分布状況を調査するとともに除去を行い、亜高山帯より上部への分布域の拡大を抑制することを試みました。

2023 年までは美女平より上部や称名滝方面など中部山岳国立公園の範囲内のみで外来植物の除去作業を行ってきましたが、2024 年には立山駅に隣接する材木坂登山道や登山口（標高 480 m）でオオバコやシロツメクサの除去を行い、国立公園内への分布拡大を防ぎました。

8 月 12 日には富山大学理学部の学生の野外実習の一環として弥陀ヶ原の駐車場で外来植物を除去し、除去作業後には例年通り、弥陀ヶ原湿原で自然観察を行いました。

従来は国立公園内では自動車道路の路肩や駐車場のほか登山道脇などに限定して外来植物を除去してきましたが、近年ではイタドリなど一部の外来植物が道路や登山道から離れた自然植生の中へ侵入・拡大する傾向を示しています。そこで 2024 年には富山森林管理署へ入林届を

提出したうえで弥陀ヶ原の木道から数十メートル離れた湿原内や天狗平山荘南側の沢筋などでイタドリやオオイタドリ、ゴマナを1～3人の会員で慎重に除去しました。

■ 40 回目のブナ活力度調査を立山で実施

中部山岳国立公園立山地域では1971年の立山黒部アルペンルート全線開通に伴って自動車の乗り入れ台数が急増しました。その後、タテヤマスギやブナなどの樹木に立ち枯れ被害が見られるようになったので、当法人の前身である「立山連峰の自然を守る会」が1985年に美女平～滝見台間でブナの活力度調査を始め、20年間にわたって調査を継続しました。2005年以降は、この調査を当法人が引き継ぎ2024年にはアルペンルート沿線と旧登山道ルートで、40回目のブナ活力度調査を実施しました。2015年に富山県が導入した立山におけるバスの排出ガス規制等によってブナの活力衰退は収まりつつありますが、アルペンルートの早期開業にともない、除雪時の投雪によるスギの樹皮剥離などの影響が年々深刻化しています。

■ 自然観察会や里山のモニタリング調査を実施

例年、季節ごとに県内各地で自然観察会を開催していますが、2024年度は春（馬場島～松尾平）、夏（室堂平～東一ノ越）、秋（高落場山登山道）と3回の自然観察会を実施し、延べ24人が参加しました。

2008年以降は、環境省と財団法人日本自然保護協会が全国で進めるモニタリングサイト1000里地調査（里地里山 一般サイト）に参加し、富山市の西部に位置する呉羽丘陵で約600種の植物の開花や結実などの状況を毎月記録しています。2024年度は積雪期を除いて9回の調査を実施しました。



夏の自然観察会（一ノ越～東一ノ越）

■ 一般県民への啓発活動を展開

6月9日には「ひとりより みんなで守る立山の自然」をテーマとしてアースデイとやま2024でパネル展示を行いました。例年と異なって富山大学のキャンパスでの開催であり、多くの若者に関心を持っていただくことができました。

10月19日には第36回富山県民ボランティア・NPO大会のブースに出展し、高山帯への外来植物侵入の問題点などを啓発するとともに、当法人の外来植物除去作業や各種の調査などの活動を紹介しました。



アースデイとやま2024の展示

白保のサンゴを守る

特定非営利活動法人 夏花

石垣島白保の海は、北半球最大級のアオサンゴ群集が見られる世界的に貴重な海でもあり、白保地域は海と共に生きるサンゴ礁文化の根付く地域でもあります。

■ 赤土流出防止対策・活着状況調査の取り組み

石垣島には、集中豪雨のたびに農地から赤土が流出しサンゴ礁の海に影響を及ぼすという、赤土流出問題があります。これは、サンゴ表面の褐虫藻による光合成の阻害や、海水の富栄養化に繋がるものであり、この問題に取り組むことがサンゴの海を守ることでもあるといえます。

沖縄における赤土流出問題に対しては、県の「沖縄県赤土等流出防止条例」の下、様々な取り組みが行われています。しかし NPO 法人夏花（なつばな）では、この赤土流出防止対策として、農地からの赤土流出を防ぐため、畑の周囲に月桃や糸芭蕉を植える「グリーンベルト大作戦」を継続してきました。

2024 年度は、毎年参加している東京農業大学から 21 名を受け入れ、サンゴレクチャーの後、農家から依頼のあった赤土が流出している圃場に、月桃を 50 メートル、250 束植栽することが出来ました。さらに企業からの依頼もあり、50 メートル、250 束植栽しました。グリーンベルト植栽活動を行うことは、継続してきた植栽活動の原点を見直す良い契機ともなり、地元の方へ流出問題を周知する良い機会となりました。

活着調査は、現地調査によって得られたデータから、グリーンベルトの活着率や成長率が高い農地の特徴（グリーンベルトの植栽時期、農地における植え付け作物の種類、グリーンベルトの植栽場所から作物までの距離等）、グリーンベルト植栽による赤土流出の防止効果を明らかにすることを調査の目的としています。昨年に引き続き福岡県の筑紫女学園大学と協働で今後の調査方法等の検討課題を洗い出した後、調査を行いました。4つの圃場を調査する中で、植栽後の水撒きや捕植作業等も重要課題と感じました。今後も植栽を協力してくださる農家さんへの呼びかけや、降雨時のパトロールを継続して実施し、サンゴや海の現状を知ることで環境保護活動が未来に繋がることを期待して、地域住民や島外からのボランティアの方々と一緒に赤土流出防止の活動に取り組んでいきたいと思ひます。



東京農業大学の学生による糸芭蕉の植栽

■ 白保海域における水温調査ロガーの設置および回収

陸域のサンゴ保全活動であるグリーンベルト植栽活動とセットで重要視しているのが、年4回季節ごとに行っている白保海域の赤土堆積量調査です。

白保海域の観測点を30ポイント設け、4人の素潜りダイバーが観測点の砂を採取しSPSS法により調査・分析を行っています。観測点ごとの結果をランク別に1・2・3・4・5 a・5 b・6・7・8で評価し、堆積量の値が季節や天候の影響で変化することを考慮しながら、比較・検証しデータ化しています。この数値はサンゴが生息することが出来るランクを表しており、数値が高いほど堆積量が多いことを示しています。ランク5 bの数値が基準であり、この数値以上からはサンゴに影響が出始めると言われています。

2024年度の調査では、年間を通して全体的に透明度が高く、とても良い数値が観測されることが多くありました。具体的な調査結果は、関係機関への情報提供はもちろん、一般の方へもホームページへの掲載や地域住民への新聞の配布などを通して広く情報共有をはかっています。今後も地道な活動ではありますが、サンゴを守る取り組みに貢献するために、陸域の活動とともに海の観察を継続していきます。

なお、サンゴ礁の白化現象が進む理由の一つとして温暖化が大きく影響しています。白保海域内に設定した定点ポイントにあるサンゴ礁の種類や成長率等のモニタリングのため、ロガーと呼ばれる水温計を白保海域内に2か所設置し1年を通して海水温の変化のデータ化に取り組みました。2023/10/17～2024/4/24期間の最高水温31.97℃、最低13.40℃、平均値24.37℃。2024/8/14～11/20期間の最高水温36.119℃、最低24.002℃、平均値29.3℃となり、サンゴの適した水温ギリギリの記録となっています。地域をはじめWEBや新聞等で結果を幅広く発信し、多くの方々に興味関心を持ってもらうことも大きな目的の一つです。

■ 環境教育及び沖縄大学との協働による小中学生を対象とした自然体験プログラムの実施

白保小学校や白保中学校を中心とした地元のこどもたちに対する環境学習や自然文化体験活動を積極的に行っています。白保小学校6年生と白保中学校2年生に対するシュノーケル体験を行いました。石垣島には高校までしかないため、高校卒業を機に島外に出る若者がほとんどですが、地元のこどもたちはあまり海で泳がないこともあり、サンゴを見たこともなく、生まれ育った地域の海を知らないまま島を出ていきます。まずは、白保のこどもたちに普段当たり前にある自然環境に親しみ、その魅力に気づいてもらうことが大切だと思っています。そして環境学習を通して故郷の自然の良さを再認識し、将来は島の自然を守り続ける大人として地域を支えてくれることを期待しています。「やまぐうキャンプ」では、小学校の教員を目指す沖縄大学の学生たちをキャンプに招き、生き物や自然に関する授業を行うことで環境教育プログラム開発も行いました。普段、大学生のお兄さん、お姉さんと触れ合う機会がない中で初めは緊張していましたが、すぐに打ち解け積極的に発言する子供たちも沢山いました。



沖縄大学 環境教育「やまぐうキャンプ」

ヒマラヤ保全協会 2024 年度活動報告

認定特定非営利活動法人 ヒマラヤ保全協会

■ サクラ・プロジェクトの始動

ヒマラヤ保全協会は 2024 年度、川喜田二郎先生のパウダル村での活動から 50 周年を迎えました。その記念事業のひとつとして、日本の桜をネパールの農山村やポカラに植える、サクラ・プロジェクトの第 1 弾が 5 月に始まりました。

ポカラ市レイクサイドのポカラ駒ヶ根友好公園とバシュンドラ公園（図 1）に、日本の桜を植栽し、桜並木の整備を開始します。今後 5 か年で 300 本の桜植栽を計画しています。日本を代表する花でもある桜の故郷は、ヒマラヤ山脈に起源するヒマラヤザクラが原種と言われています。この秋咲きの桜が日本にたどり着き、千年以上のときを経て日本で 300 種類を超える品種に増えたと言われています。本プロジェクトでは公園の景観整備と同時に、ヒマラヤに起源する桜が日本で増やされ、その様々な品種、いわば一きょうだい桜一の「ヒマラヤへの里帰り」という物語も大切にしていきます。そのため、できる限り多くの品種を植栽し、桜がつかない日本とヒマラヤの数奇なご縁をたくさんの人に知ってもらいたいと考えています。



（図 1）サクラ・プロジェクトでの植栽予定地
（今後 5 か年で合計 300 本を植栽）

■ 新規ナーサリー（苗畑）の開設

ポカラのレイクサイドで 2 つのホテルを経営するジャナク・バハドゥル・カルキ（Janak Bahadur Karki）氏の協力を得て 2025 年 4 月に、ポカラ・レイクサイドに新規ナーサリー（苗畑）を開設しました。ホテル・オーキッド脇の駐車スペース（約 40m²）を借り受け、宅地整備を実施しました。ここで桜苗や新規果樹苗などの育苗や栽培実験で、遠隔農村にも多くの樹木や果樹苗を届けたいと計画しています。



（図 2）ポカラ・ナーサリーで保管される
100 本の桜の稚幼木

■ 桜苗の輸送と桜植樹祭の開催

サクラ・プロジェクトでは手始めに 2024 年 5 月に日本で調達した桜苗 100 本を、ポカラに

輸送してきました。日本の桜は園芸品種も合わせると、300種類以上あるとされています。この第1弾活動では、ネパールの気候に適した品種を特定するために、開花時期や花付きなどが異なる19種類の品種を持ち込みました。

成田空港での植物検疫で厳しい検査を受け、何とか機内に運び込むことができました(図2)。カトマンズ到着後は、手配しておいたワンボックスに積み込み、陸路ポカラへ10時間の道のりを向かいました。さすがに3日間の行程を耐えた桜苗は、弱っている苗木もありましたが、ポカラの新設ナサリーですぐさま水を吸いあげさせて、そのほとんどが元気なままで植樹祭を迎えることができました(図3)。桜の植樹祭は2024年6月5日(水)の世界環境デーに合わせ、ポカラ市と、カウンターパートのホームさん、ジャナクさんが企画してくださいました(図4)。今回は、駒ヶ根友好公園とバシュンドラ公園に、合計で50本の桜を植栽してきました(図5)。植樹祭にはポカラの市長をはじめ、40人を超える参加者があり、我れ先に桜の苗木を植えたがる無邪気な姿がありました。

サクラ・プロジェクトでは今後も継続して、日本の桜苗の運搬や導入を続け、向こう5か年で300本の桜をポカラと遠隔農山村に植樹したいと考えています。ポカラや農村の小学校への無償提供や、トレッキング街道の街路樹などとして、桜並木を通じた環境への配慮と、文化的景観づくりを両立していきたいと思います。



(図3) 植樹祭に向けて桜苗の手入れやケアの様子



(図4) 植樹祭の様子(その1)



(図5) 植樹祭の様子(その2)



(図6) 公園に植栽された桜苗

ウミガメとその産卵地を守る

特定非営利活動法人 サンクチュアリエヌピーオー

■ これまでの活動

1986年に浜松で産卵を確認して以来38年間、アカウミガメの産卵地の保護に取り組んでいます。5月になると静岡県と愛知県に跨がる110キロの遠州灘海岸に、絶滅危惧種のアカウミガメが産卵に訪れます。浜松市は、1990年には「アカウミガメとその産卵地」を浜松市指定文化財としました。1992年には、水産庁の重要水生生物保護事業の指定を受け、静岡県では採捕には許可が必要となり、2014年には静岡県がアカウミガメや卵の採捕に罰則規定を設けた指定希少野生動植物の指定を行いました。

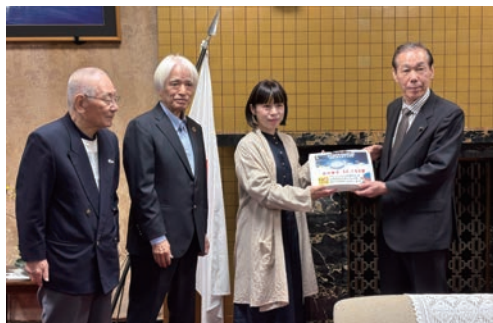
サンクチュアリエヌピーオーは、啓発活動として保護活動の産卵調査やふ化調査を一般公開し、産卵地保護のためビーチクリーンアップや砂浜回復事業への参加を呼び掛け、毎年多くの市民や企業の参加を得ています。海岸の環境保護活動では、行政に四輪駆動車の海岸走行禁止を働き掛け、1997年に浜松海岸への車両の乗り入れが規制され法改正にも成功、2000年には新海岸法が施行されました。また、海岸のごみ問題では、砂浜の生物多様性を守るために行政の重機による清掃活動を止め、市民による海岸清掃を進め、年間2万人の参加者による清掃活動を実施しています。

問題解決をしながら進めてきた保護活動は、ここ数年、県立の浜松新野球場建設計画という新たな問題が出てきました。アカウミガメは世界的絶滅危惧種であり、静岡県希少野生動植物指定種、浜松市指定文化財です。ウミガメは、明るい光や月の光を目指し海に向かうのではなく、人の目には見えない短い波長の光に導かれ海に帰ります。夜間、人工光の蛍光灯やLEDの光が海に漏れると、アカウミガメは、海と間違えて上陸してしまいます。野球場や周辺施設の光は、代替地がないウミガメにとり、絶滅に拍車を掛けることとなります。

■ アカウミガメの保護・調査活動

サンクチュアリエヌピーオーの保護調査活動は、浜松市から掛川市までの遠州灘海岸約55キロにおいて、5月から8月まで産卵調査を実施し、8月から10月まではふ化調査及び子ガメの放流活動を行っています。産卵期は、毎日早朝4時から調査を開始し、産卵を確認すると卵を保護して海岸に建てた卵の保護柵に埋め戻します。これは、海岸を走行する車両から守る事と共に卵の盗掘防止のためです。

卵のふ化には、地温が大きな影響を与えることから保護柵内の地温測定も行い地温とふ化の



25年3月13日、静岡県知事と
県議会議員に署名と要望書を提出



ウミガメの卵を保護する保護柵の整備

関係も調査しています。ふ化終了後には、産卵巣毎にふ化しなかった卵の状態を調査し有精卵か無精卵かを判別して記録しています。また、遠州灘海岸は市街地に近いため、夜間の子ガメへの紫外線影響調査を行い、92%が陸に向かうことを確認し、人工光による影響調査も実施しています。子ガメの放流は、生存率を高めるために鳥獣害や夜間の人工紫外線による迷走を防ぎ確実に海に帰れるように、早朝から日没前までの自然光のもとで放流しています。



ふ化した子ガメは、紫外線の強い海に向かいます

■ 保護活動の成果

静岡県では、ウミガメが罰則規定のある指定希少野生動植物に指定された効果が出て、ここ5年間は盗掘がありません。ウミガメの保護調査活動と子ガメなどの観察会、海岸清掃・砂浜回復事業、海浜植物観察などの事業には、市外の参加者が年々増加するなど啓発活動は順調に進んでいます。市民に、ウミガメや野生生物がゴミを誤飲し被害を受け、車の走行で海浜植物が枯れ砂浜が喪失した現場を見せることで、ウミガメを取巻く環境問題の啓発を進めています。また、海洋汚染防止活動として新たに始めたマイクロプラスチックゼロプロジェクトでは、プラスチックごみのマイクロ化を防ぐため海岸にごみ箱を14基設置し、年間15トン以上の海岸ごみを回収しています。



産卵調査中の調査員

■ 砂浜回復事業

遠州灘海岸の砂浜の減少は、ウミガメの産卵地の発見とほぼ同じ頃から始まりました。世間では、ダムが砂をせき止めたから砂が減ったことが原因とされています。しかし、私たちは、アカウミガメの産卵を確認してから海岸の環境調査を通じて、車両の海岸走行が砂浜の減少の一因であることを確認しました。車のわだちは、海浜植物を枯らし砂浜の浸食を助長しました。そこで、市民や多くの企業に呼び掛け、協働で砂浜回復事業を実施しています。

この事業では、麻袋に砂とコウボウムギの種子を詰めて浸食され低くなった砂浜に土のうとして積み、発芽・増殖させて砂の移動を食い止め、砂浜を次第に成長させてウミガメが安心して産卵できる自然海岸の回復を目指しています。この事業は、企業のCSRとしても実施しています。

■ 海岸を取巻く環境変化と今後の懸念

2020年、浜松海岸に高さ15メートルの巨大堤防が完成しました。これにより海風の動きが変わり、砂浜の変化で産卵地が守れるかが懸念されます。また、海岸隣接地に計画されている野球場建設は、ナイター照明が光害となり、子ガメの海帰に致命的な影響を及ぼすことが危惧されています。ナイター照明が、アカウミガメに与える影響が問題となり計画が延期されています。遠州灘海岸の貴重な海岸環境を保全し、絶滅危惧種の保護をより確実な形にしていきたいと考えています。そのため、県立浜松新野球場建設計画は、必ず見直しを実現する事が大切だと考えています。

2024 年度「トンボの保護区を守る」活動報告

特定非営利活動法人 桶ヶ谷沼を考える会

■ はじめにー 2024 年度の活動全般を振り返って

全国で生息の危機状態にある絶滅危惧種「ベッコウトンボ」が、静岡県西部の磐田市にある「桶ヶ谷沼」に奇跡的に生息しています。この「種の保全」という大切な役割を自覚し、活動しているのが「NPO 法人桶ヶ谷沼を考える会」です。行政・自治体・地元地権者の共感的な協働の中核的な役割を担い、指導的立場から各種事業を推進し、桶ヶ谷沼の自然の保全・保護運動と自然教育の担い手の受け皿的な役割をも果たしています。



子ども達と沼を訪れた人々（5月3日）

本年度も、大きな目的である「種の保全」「ベッコウトンボの保護と増殖」及び「環境の保全と改善」に向け取り組みを継続してきました。ベッコウトンボの確認個体数調査では2022年度に380頭と持ち直すことが出来ましたが、昨年度は237頭、本年度は191頭でした。夏季の高温化など気象条件悪化の影響による減少を悲しんでいるばかりでなく長い目で見なければなりません。

ベッコウトンボを絶滅させないための根本的な「種の保全・増殖マニュアル」に添った事業を積極的に展開してきました。それにしても微妙な生息環境の維持が必要で有ります。一部の専門家に任せるだけではなく、皆で役割を担って活動に参加してもらえよう計画し実施しました。

また8年目の「おけがや自然塾」は申し込み受付開始時間に直ぐさま定員に達するほどの人気でした。その活動を通して子ども達とともに桶ヶ谷沼の自然を楽しみ、大切さを伝えていく活動を充実させることができました。

■ ベッコウトンボの生息区域での活動

ベッコウトンボの個体数は未だ絶滅の危機的状況から脱したと言える状況ではありません。2022年度から「ベッコウトンボ種の保全・増殖」に特化したコンテナの整備を行い「甕塚（こしきづか）のゆりかご容器」と称した特別な区域での活動を継続しています。環境省から許可を得て成虫の捕獲・採卵を行い、幼虫（ヤゴ）の成長を助けるべく全職員で協力して生餌のイトミミズ供給（7月～11月び3月）を継続して行うなど、ベッコウトンボの保護・増殖を図っています。また夏季のゆりかご容器（コンテナ）水温の高



ボランティアも参加して甕塚で作業（6月8日）

温化・渇水対策のために（一社）磐田青年会議所の協力を得て、コンテナの周りに支柱を立てよらずで日除けを作ったことにより、一定の効果をあげることができました。

■ 磐田市内事業者や市民ボランティアとの連携保護活動で 沼本体からのベッコウトンボ羽化の復活へ

沼の南部や沼のへそに当たる入り江で、芦原を浚渫して新たな開放水面の創出を試みています。これも「マニュアル」による保全・増殖事業の一つです。甌塚のすぐ北に当たり、同時に整備していくことがベッコウトンボの生息場所の拡大のために相乗効果を生むものと思います。但し芦原の浚渫は簡単な作業ではなく大変な労力を要します。ボランティアの協力を得て地道に作業を継続していきたいと考えています。ヤゴを捕食する外来種調査・捕獲駆除も行いました。

また、市内事業者13社の参加を得て、環境保全活動連携事業を年間8回行いました。桶ヶ谷沼の存在及び「トンボの楽園」であることを知ってもらい、これまでの保護・保全への努力などを理解していただくとともに、実際に協働での環境保全活動を企画・実施しました。「甌塚の水辺」のトンボ増殖用水槽（コンテナ）の整備、また沼に繁茂した植物の伐開、外来種駆除等の大切な事業に参加していただき、トンボの産卵など動植物の生息の場を保全するための活動ができました。来年度以降もこの事業をぜひ継続・発展させていきたいと考えています。今後、沼本体の入り江等からベッコウトンボ達が羽化するのを楽しみます。



ボランティアと協力して入り江で作業
(3月9日)

■ おけがや自然塾の開催

「おけがや自然塾」も8年目となり年間9回のプログラムを開講しました。本年度も塾生25名定員（保護者は各家庭1名付き添い）で募集しました。桶ヶ谷沼の自然を学ぶ機会がとても貴重なことと感じており継続して企画してきました。「アメリカザリガニの勉強と調査」「トンボ観察と調査（春・夏）」「桶ヶ谷沼のアリの観察」など子ども達は興味津々で毎回高い出席率となりました。また、当初から参加した塾生が今や高校生になり、指導者の補佐役で活躍してくれました。将来は野生生物の研究者になるなど、自然保護活動の担い手に成長してほしいと願っています。



おけがや自然塾・野外活動前の講義
(10月6日)

■ 継続調査の実施

- アカトンボ調査（天竜の森、桶ヶ谷沼観察路）
 - 越冬昆虫（ワラ卷き）調査
 - アメリカザリガニ調査
 - 淡水魚の生息状況調査（年2回）
 - 渡り鳥調査
 - トンボ用コンテナ管理によって毎年の変化を調査・記録及び昆虫類の調査（通年）等
- 諸々の事業で今後もトンボの楽園を守り、育てることの継続と拡充を図っていきます。

上総自然学校 活動報告 2024

上総自然学校（現在 川原井自然学校）

■ 田んぼのイベント

例年通り田んぼのイベントを行いました。コロナ禍も過ぎて、オタマジャクシが居る田んぼで田植えをしました。田の草取りの際には、クサガメを見つけて、ゲンジボタルとヘイケボタルの違いを見て、稲刈りの際には、たくさんのカマキリを捕まえたりしました。泥んこになった体は、杉の倒木から作った薪でお湯を沸かして、服ごと洗います。

夏の暑さは問題です。木陰のハンモック上の枯れ枝と枯れ木の処理をしました。



田植えで泥んこになった体を服ごと洗います

■ 増えてきた日本リス

植林したクルミが大きく育ち、ニホンリスを見かける機会が増えてきました。植林した苗木が鹿の食害に遭うことが多くなりましたが、蹄の動物が竹や丸太の上を歩かない習性を利用して、苗木を守っています。以前植林した松、コナラ、杏も育っています。



クルミを食べる日本リス

■ 猛禽類の繁殖

フクロウの巣箱で、今年もフクロウが繁殖したようです。去年とは違う巣箱を利用していました。フクロウの巣箱の好みがあったかもです。

サシバの幼鳥とノスリの幼鳥も確認しました。フィールド内か、近隣で繁殖したようです。オオタカによる食跡も数度見かけましたので、狩りにやってくるようです。オオタカ、ツミはセンサーカメラにも映っています。



ノスリの幼鳥

■ 毎月の生態調査

千葉県生物多様性センターの大島氏に依頼して、毎月フィールドの調査を行っています。モートンイトトンボの数が減りました。毎年湿地をトラクターで攪拌するのを、2年ほどやってい

ないと、メタンガスがかなり溜まっていました。この冬にトラクターで湿地を攪拌したので、夏に確認します。

ホソミイトトンボが大量発生していました。越冬するイトトンボなので、温暖化で冬が暖かくなったのに関係があると思われます。ホソミオツネトンボが年々多くなっているのも関係があると思います。モンキアゲハ、ツマグロヒョウモンも増えています。イチョウウキクサ、ヒルムシロ、車軸藻など湿地の珍しい植物も健在です。

5月に灯火調査を行いました。調査のメンバーも増えて、色々な専門分野からの結果が出てきています。2023年の7月に比べると、ゲンゴロウなどは少なく、そういうノウハウが溜まります。

冬季に、朽ち木を斧で割っての調査を今年も行いました。朽ち具合、菌の入り具合で入っている幼虫の種類が変わります。ボロボロに朽ちたコナラには、カブトムシの幼虫が入っていました。

環境省のモニタリング 1000 の調査も続けて行っています。

センサーカメラを使つての調査も継続しています。フクロウ、カワセミの求愛行動など、珍しい動画が撮れています。



田植えの後の集合写真

■ 千葉県企業向け生物多様性セミナー

千葉県企業向け生物多様性セミナーの講師をしました。生物多様性を実践するには。というお題だったのですが、理論ではなく、実践結果について話をしました。参考にさせていただいて、お役に立てれば幸いです。

■ 竹製柵作り

イノシシ避けに竹を使った柵を作ってみたところ、柵の中と外が明らかに違い、セリなどの植物が残されています。アカガエルの産卵が確認され、トンボ類も産卵しています。

■ 森林の笹刈り、草刈り

田んぼに隣接する森林の笹刈り、草刈りを進めています。そもそも、害獣対策ですが、猛禽類の狩り場になったり、蘭が出て来たり、いろんな効果があります。

■ 大月川下流部の竹伐採

田んぼの 1.5 キロ下流の大月川の両岸の竹の伐採を進めています。1 番の目的は、害獣対策で竹が必要なのですが、竹を伐採したことで、川に日差しが届くようになり、カワニナが増えて、ゲンジボタルが少しずつ増えています。魚類も増えて、イタチをよく見るようになりました。セリも増えているので、キアゲハなども増えそうです。見通しが良くなり、イノブタが大人しくなっており、猛禽やカワセミ、アオサギの狩場になっています。ハグロトンボをよく見ます。

川の中の調査を行ったところ、スジエビなども居て、水質も良いようです。

ゾウを守るための活動報告 2024

認定特定非営利活動法人 トラ・ゾウ保護基金

トラ・ゾウ保護基金（JTEF）は、これまで、ワシントン条約で2016年に採択された「国内象牙市場閉鎖決議」にもとづき、日本政府と東京都が象牙の国内取引を禁止することを、象牙製品を扱う民間事業者に対しては自主的に象牙製品の販売を停止することを、一般消費者に対しては（主要な象牙製品である）象牙のハンコを避け、他の素材のハンコを選ぶことを働きかけてきました。

■ 環境大臣に国内象牙市場閉鎖を要望

2024年4月10日、JTEF 理事長と事務局長が、伊藤信太郎環境大臣（当時）と環境省大臣室で面談、JTEF と EIA を含む計 23 の団体（うち 2 つが日本の団体）から国内象牙市場閉鎖を求める要望書をお渡ししました。環境省は2025年3月に「種の保存法」の見直し作業を開始していますが、象牙の国内取引規制の見直しに高い優先度を置くこと、象牙に広く認められている禁止の例外を撤廃すること、真に狭い例外を除く国内象牙市場閉鎖のための法改正を行うことを要望しています。伊藤大臣には終始真摯に対応していただきました。



大臣室で環境大臣に要望書の内容を説明

■ 東京都の象牙業界に対する補助金交付について、知事へ意見書提出

2024年6月11日、JTEF は、米国の NGO である Environmental Investigation Agency (EIA) とともに、小池百合子東京都知事に、「象牙業界団体に対する東京都補助金に関する意見書」を提出しました。

小池百合子都知事は、2020年1月以来、象牙取引規制のあり方の評価、厳格化を模索してきました（担当は政策企画局）。検討を行った都の有識者会議は、その報告書で一部製品を除く象牙販売を禁止する条例の検討を提言しています（2022年3月）。その一方、東京都の産業労働局は、長年にわたって、象牙製品に対する国内需要を高めること、あるいは将来の国際象牙取引実施に向けた検討を進めることを目的とした象牙業界（東京象牙美術工芸協同組合）の事業に対して、補助金を投入し続けてきました。

このような補助金交付は、小池知事の新たな取組みの趣旨にまったく沿わないもので、意見書では、補助金交付の即刻停止、都内の市場閉鎖のための条例制定を求めています。

■ 動物園とのコラボでゾウの保全について学ぶ教育プログラムを開催

2024年8月24日、よこはま動物園ズーラシアで、小学校高学年向けの教育プログラムを開催しました（2回連続講座として企画され、17日には金沢動物園でプログラムを実施する予定でしたが、大型台風接近のため中止）。

■ ワシントン条約第 78 回常設委員会にオブザーバーとして審議参加・意見表明

2月3日、絶滅危惧種の国際取引を規制するワシントン条約の第78回常設委員会（SC78）が、スイスのジュネーブで開催され、トラ・ゾウ保護基金もオブザーバー参加しました。

JTEF が注目していた議題は、各国の国内市場が違法取引に寄与しているかどうかをデータ上明確にする目的で提案されていた「象牙押収と国内象牙市場に関する分析」でした。

ところが、予想外の出来事が起きます。SC78 開幕の前日までに、ワシントン条約事務局が運営する「ゾウ取引情報システム」（ETIS）の専用ウェブサイトで、各国に関する象牙押収データの概要が、公開されていたことが判明したのです。ここで公表されたデータには、それぞれの国が関係した象牙押収の各年の件数および総重量が含まれています。これらの情報こそ、日本の国内象牙市場が「密猟または違法取引に寄与している」かどうかを客観的に評価するために求められていたデータでした。

2月5日、「国内象牙市場」の議題が審議されました。事務局からの「象牙押収と国内象牙市場に関する分析」の検討を幕引きすべきとの提案に対し、これまで分析を求めてきたアフリカ諸国は、上記のとおり各国が関与した象牙押収データの概要が公開されたことを歓迎し、特に事務局提案に反対しませんでした。トラ・ゾウ保護基金も世界の12のNGOを代表して発言し、公表されたデータにより、日本のオープンな国内象牙市場が違法な象牙の国際取引に「寄与している」ことが証明された、と強調しました。今回公表されたデータによれば、コロナ禍が深刻化する前の10年間（2010～2019年）に日本が関与した象牙押収は、合計257件、押収された象牙の総重量は3.3トンに達します。



世界の12のNGOを代表して、
JTEF 事務局長が発言

■ 国内象牙市場閉鎖を求める請願署名の開始と Kick Off シンポジウムの開催

2026年には絶滅危惧種の取引規制などを行う「種の保存法」の改正案が通常国会に提出される見通しです。この改正法案に、国内象牙市場閉鎖が盛り込まれなければなりません。そこでJTEFは他の3団体とともに、2025年5月中に国内象牙市場閉鎖の実現を求める請願書を国会に提出することとしました。請願の内容は、必要最小限の例外を除き、象牙売買の禁止を求めるものです。

そのKick Off イベントとして、2025年2月22日、シンポジウム「アフリカのゾウを象牙密猟から守るために、象牙消費国：日本にいる私たちができること」（東京都港区）を開催しました。象牙取引によるアフリカゾウの危機と世界の動き、日本の国内象牙市場の歴史と現状について話題提供し、請願署名の呼びかけ人である、見城美枝子さん（元TBSアナウンサー）、土居利光さん（前恩賜上野動物園園長）、ヒサクニヒコさん（漫画家）らにコメントをいただきました。また、象牙製品のユーザーとして三味線演奏家、箏の付属品の代替素材製造・販売をされている方もお招きし、伝統的な象牙ユーザーの理解が得られる象牙市場閉鎖のあり方を議論しました。



シンポジウムを主催した4団体を
代表して挨拶する JTEF 理事長

日本最大級のオオサンショウウオの 生息地での環境保全活動

真庭遺産研究会

真庭遺産研究会は、岡山県真庭市とその周辺域において自然保護を進めるために、ふるさとの自然や景観（昔懐かしい山里の風景や町並み）とあわせて野生生物の調査を行い、生態系への関心を高めることで、地区や集落との活動連携を図っています。

とりわけ、特別天然記念物オオサンショウウオは、真庭地域が全国一の生息地とされており、岡山県真庭市北部は、32,823haに及ぶ面積で「オオサンショウウオ生息地」の天然記念物指定を受けています。しかし、その保護行政の動きはにぶい状況です。

これまでの調査で、繁殖地も複数確認できた一方、護岸工事により繁殖地となる自然の川岸が失われ繁殖巣穴が見つからない河川や、個体数が減少している河川も多くみられるようになっています。また、大雨の度、繁殖地から個体の下流に流されていますが、堰堤などに妨げられ、繁殖地へ戻ることができなくなっており、構造的にオオサンショウウオの生息個体の減少が続き、絶滅の懸念も示されています。



倉見川溪流での自然体験型環境学習

■ 2024 年度の活動

2024 年度も、下和川水系のほか、吉井川水系倉見川の源流域での河川環境調査を行いました。人が水辺に近づきやすい場所を確保し、道づくりやロープ設置などの整備を進めて、シャワーラインミングを取り入れた自然体験型環境学習プログラムを実施するとともに、これらの清流域を中心に、オオサンショウウオの生息巣穴となる水中の横穴や、オオサンショウウオが潜みそうな岩や石の分布などを確認しました。

岡山県北部の山村地域は、中国山地の麓にあって、集落の近くや奥地に、落葉樹林の中を川が流れる美しい清流の景観が多く残されています。

このような環境は、人と川との暮らしの係わりが希薄化する中、川岸に育つ落葉樹が伐採されることなく数十年育ち、発達した河畔林や溪畔林となって、オオサンショウウオの良好な生息環境となっています。また、知られざるビューポイントや美しい川の景観が残る秘境域となっていることから、オオサンショウウオ保護活動を進める上で必要となる住民市民の啓発活動を進めるにあたり、これらオオサンショウウオ生息地にあって、美しい清流と落葉樹の景観が続く下和川長とろと倉見川溪流をフィールドとして、川の自然体験型環境学習プログラムを実施しました。

1) 下和川水系と倉見川における川の自然体験型環境学習プログラムの実施

オオサンショウウオ保護活動の拠点として、下和川水系では真庭市真加子、吉井川水系では倉見川溪流において、岡山県北部に暮らす児童生徒と保護者を対象に自然体験型環境学習プログラムをそれぞれ11日（回）実施しました。下和川長とろでは490人、倉見川溪流では697人の参加があり、延べ1,187人が、オオサンショウウオ生息地となる美しい川と溪流の自然の中で、オオサンショウウオ頂点とする川の生態系について学習しています。

今後、募集を隣接県まで広げるとともに、回数を増やして実施することで、より多くの市民・県民にオオサンショウウオの生息環境とその現状を知ってもらい、関心をもってもらうために活動の輪を広げることとしています。

なお、倉見川では、昼間の自然体験活動中にも全長70cmを超える個体や幼生の生息を確認することもあり、重点的にオオサンショウウオ調査を行うこととしています。



下和川水系での夜間オオサンショウウオ観察会



捕獲したオオサンショウウオを子どもたちが観察

2) 下和川水系のオオサンショウウオ調査と夜間観察会

下和川水系で10年以上にわたり行っているオオサンショウウオの生息分布調査によって、下和川支流の植杉川と山乗川において確認できる個体数が増えていることから、植杉川と山乗川を含む下和川水系には、オオサンショウウオの生息や繁殖に適した場所が存在していることが判明し、その要因として、下和川水系には発達した河畔林や溪流林が残されていることが大きいと考察されました。

2024年度、夜のオオサンショウウオ観察会を10夜（回）実施し、毎回5匹以上のオオサンショウウオを観察し、記録に収めています。10個体以上確認できる日もあり、この夏は297人の参加がありましたが、今後は、夜間観察の場所を倉見川にも求め、観察による個体群への負荷を減らす予定です。

3) 河畔林の保全再生によるオオサンショウウオの生息環境保全活動

田羽根川とその下流の旭川におけるオオサンショウウオの生息状況や、植杉川・山乗川での生息個体数が増えている現状をみると、大雨で流れる個体の多くは土砂などに埋まって死滅する一方、多くの個体は巣穴や横穴に避難してとどまり、平常の水量に近づくのを待って活動している様子がうかがえます。オオサンショウウオを保護するため、河畔林・溪流林の保全再生活動を進めていますが、河川管理者や地権者への協力要請も行い、計画的な植生管理や自然護岸再生を行うようにしたいと考えています。

インドネシアにおけるオランウータン保護 活動の基盤強化に向けた植林活動

一般社団法人 熱帯林行動ネットワーク (JATAN)

■ プロジェクト実施の背景

熱帯林行動ネットワーク (JATAN) は、インドネシアのボルネオ島 (カリマンタン) の東部を拠点に活動するオランウータン保護センター (Centre for Orangutan Protection、以下「COP」という。) と連携して、これまでオランウータン保護活動に取り組んできました。オランウータンは国際自然保護連合のレッドリストで絶滅危惧種に指定されています。インドネシアで急速に拡大しているパーム油を生産するためのプランテーション開発により、オランウータンやその他の野生生物の住処となる森林が失われていることが背景にあります。



スンガイ・レサン保護林に野生復帰したオランウータン

インドネシア国内には、オランウータンの保護・救助に取り組む団体がいくつかありますが、リハビリセンターには数百頭が保護されている一方で、野生復帰させるための森林は減少の一途をたどっており、現地活動は対症療法にとどまるジレンマを抱えています。

2024 年度のプロジェクトでは、東カリマンタン州の中央部に位置するスンガイ・レサン (Sungai Lesan) 保護林周辺を対象地としています。



保護林周辺の、農地開拓のための伐採により劣化した場所

スンガイ・レサン保護林には1万ヘクタールを超える熱帯林が広がっており、野生のオランウータンも数多く生息しています。2018年から2021年までの間に、COPの保護施設からも10頭のオランウータンがこの地域に野生復帰しました。しかし、境界の外側にはパーム油を生産するためのプランテーションが保護林を取り囲むように広がっており、また農地開拓のための伐採や火入れなどにより劣化してしまった森林も見られます。その結果、この地域に住

む野生のオランウータンは、限られた地域での生活を余儀なくされており、特に餌が少ないとされる乾季には、餌を求めて境界の外にまでやってきて、住民たちが管理している農作物（ランブータンやジャックフルーツといった果物）を食べてしまうといった出来事が報告されています。

本プロジェクトでは、この地域での植林活動を通じて、侵食により劣化した保護林周辺の植生を回復させるだけでなく、野生のオランウータンと住民たちとの衝突が生じないようにするための緑の緩衝地帯を設けることを目的としています。

■ 2024 年に実施した活動の概要

2024 年度も、現地カウンターパートである COP 主導のもと、東カリマンタン州の中央部に位置するスンガイ・レサン保護林の北部境界周辺での植樹活動を実施しました。

この地域での植林活動は今年で 2 年目を迎えますが、昨年度に引き続き、野生のオランウータンによる食害に悩むシドバンゲン村の農民グループの方々の協力を得て、2023 年度に植林した地域のモニタリングおよび新たな地域での植林活動を行いました。

まずは、2023 年度に植林した地域でのモニタリングを実施しました。一部、生育に失敗した苗木もありましたが、全体の 8 割弱が順調に育っていることを確認しています。

その後、2023 年度の植林活動の地域やスケジュールについて、農民グループと打ち合わせを行いました。昨年度と同様に、レンブ（jambu air）やランブータン（rambutan）、月桂樹（salam）、グアバ（jambu biji）、コパラミツ（cempedak）、コーヒー（kopi）、ジャックフルーツ（nangka）など果樹を中心に選定し、今年度は合計で約 1,080 本を植林しました。また、普及啓発活動の一環として、シドバンゲン村の小中学校の子どもたちを対象に、森を守りつつ野生生物と共生していくことの重要性について授業を行いました。

今後も、シドバンゲン村の住民たちとの協力関係を維持しながら、この地域で野生のオランウータンとの軋轢が将来的に解消されるよう、植林した果樹の維持・管理や新たな地域での植林を引き続き行っていく予定です。



植林活動に協力してくれたシドバンゲン村の住民たち



シドバンゲン村の小学校で実施した啓発活動の様子

NPO クワガタ探検隊 2024 年度活動報告

特定非営利活動法人 NPO クワガタ探検隊

■ はじめに

「NPO クワガタ探検隊」は、大阪北摂地域に残された里山を舞台に、日本古来からの自然観〈共生・畏敬・感謝〉に基づいて、「未来の森の守り人」を育成することを目的にしており、1993 年から任意団体として活動を開始し、2009 年 9 月には NPO 法人として認証されました。

現在、大阪北摂地域の里山は放置され荒廃しきっています。その上、未来を担う子どもたちは、ゲーム機等バーチャル世界に没入し、「本物の命との“ふれあい体験”」は皆無の現状です。「NPO クワガタ探検隊」は、こうした状況を憂い改善するため、かけがえのない里山への興味・関心を啓発するための活動を 32 年間実践してきました。

2024 年度は、(1) 自然保護・啓発活動として創作絵本を作成し、子どもたちへの『読み聞かせ活動』、(2) 森づくりのため、クヌギ、コナラ苗の『植樹活動』、(3) カブト虫・クワガタ虫を増殖して、元の里山に帰す『里親塾活動』、などの活動を実施してきました。

これらの活動は、すべて行政や市民、企業、財団との『協働活動』として取り組み、多くの成果を残すことが出来ました。

■ 1. 『読み聞かせ活動』の実施

「NPO クワガタ探検隊」では、自然保護・啓発活動として創作絵本を作成し、子どもたちに読み聞かせ活動を行ってきました。これまで作成した創作絵本は 22 巻に上り、自然の命の大切さを子どもたちに伝えています。

2024 年度は、新・創作絵本『何でやねん！昆虫の王様〈第 22 巻〉』を、大阪府池田市内の全幼稚園、小・中学校などの教育機関に寄贈し、大いに活用してもらうことができました。

また、国立国会図書館、大阪中央図書館にも「永久保管」していただきました。



オオクワガタのオスとメス



池田市五月山自然公園での「紙芝居」の上演

■ 2. クヌギ、コナラ苗の『植樹活動』の実施

森づくり〈未来の樹液場造り〉のために、箕面国定公園（エキスポ森）に、樹液樹であるコナラの苗を、地域ボランティアの皆さんと協働で植え付けました。（12月実施、参加30人）

■ 3. 『里親塾活動』の実施

大阪北摂地域の里山に棲むカブト虫・クワガタ虫は、絶滅寸前です！

NPO クワガタ探検隊では、地域種のカブト虫・クワガタ虫を各家庭で飼育増殖してもらい、産卵→幼虫→蛹化（昆虫の幼虫が変態し、さなぎになること）→羽化させた後、『元の里山』に帰し定住できるようにする『カブト・クワガタ虫の里親飼育活動』に取り組んでいます。

この一環として、①カブト虫増殖・里親塾（7月、9月実施、参加合計40人）、②カブト虫幼虫・里親塾（10月実施、参加26人）などの活動を行いました。

カブト虫の里親飼育活動では、「里親飼育セット（カブト虫オス・メス、産卵マット、昆虫ゼリー、養育マット、幼虫ビン）」を使って各家庭でカブト虫を飼育してもらい、増殖したカブト虫は元の里山に放虫しました。

6か所の放虫場所では、25年前からクヌギの苗木を植樹しており、数年前から「樹液場」ができあがっています。カブト虫が定住するまでもう一歩です。

■ 4. すべて協働活動

「NPO クワガタ探検隊」の活動は、1993年の任意団体としての活動から、32年になります。

この間、行政、市民、企業、財団との協同活動により事業を実施し、多くの成果を残すことが出来ました。



樹液樹であるクヌギ、コナラ苗の植樹活動により、「樹液場」ができつつあります



箕面国定公園での「里親塾」チャレンジしませんか



ビン飼育にチャレンジ！



財団との協働活動

掲載団体のURL

団体名	URL
公益財団法人 緑の地球防衛基金	https://green-earth-japan.net
特定非営利活動法人 FoE Japan	https://foejapan.org
特定非営利活動法人 熱帯森林保護団体	https://rainforestjp.com
特定非営利活動法人 尾瀬自然保護ネットワーク	https://oze-net.com
特定非営利活動法人 立山自然保護ネットワーク	https://npoanc.blogspot.com
特定非営利活動法人 夏花	https://natsupana.com
認定特定非営利活動法人 ヒマラヤ保全協会	https://ihc-japan.org
特定非営利活動法人 サンクチュアリエヌピーオー	https://www.sanctuarynpo.jp
特定非営利活動法人 桶ヶ谷沼を考える会	https://www.okegaya-tombo.com
上総自然学校（現在 川原井自然学校）	https://www.kawaharai.com/
認定特定非営利活動法人 トラ・ゾウ保護基金	https://www.jtef.jp
真庭遺産研究会	現在作成中
一般社団法人 熱帯林行動ネットワーク	https://www.jatan.org
特定非営利活動法人 NPO クワガタ探検隊	https://www.rinya.maff.go.jp/ https://mori hug.net/network/groups/000185

2024年度

環境諸問題研究・活動報告書

2025年6月1日 発行

編集発行人 公益財団法人 緑の地球防衛基金

編集責任者 奥 井 俊 二

印刷所 日本印刷株式会社

発行者 公益財団法人 緑の地球防衛基金
〒104-0033 東京都中央区新川2-6-16
馬事畜産会館203

電話 03(3297)5505

メールアドレス defense@green.email.ne.jp

頒 価 1,000円(送料込み)

